

▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶ オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察 — 研究プロジェクトの開始にあたって — プロジェクト研究報告

千葉商科大学商経学部専任講師

大賀 紀代子
OGA Kiyoko

はじめに

今回、経済研究所より2018年度から2019年度にかけて、2年間のプロジェクトとしてオリンピックに関する研究プロジェクトを立ち上げることとなった。

2020年に東京オリンピックが開催されることが決定されてから、高等教育機関においては、オリンピックに関する研究に取り組み、オリンピックの歴史や意義について広く社会に伝えることが期待されている。そこで、「オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察」と題し、専門分野の異なる本学教員6名が、それぞれの専門に関する領域からアプローチをすることで、オリンピックの歴史や意義について多面的な視点から考察を行うこととした。19世紀のオリンピック復興運動という歴史的な事実に着目し、これに関する議論がどのような社会背景で起こり、どのような論争を生み出し、どのようにして向かうべき方向が形成されてきたかについて、共同研究を通じて明らかにしていく予定である。

研究メンバーは、師尾晶子教授（歴史・文化領域）、藤野奈津子教授（法・歴史領域）、荒川敏彦准教授（社会・文化領域）、沖塩有希子准教授（教育・歴史領域）、朱珉准教授（経済・社会領域）、そして筆者（経済・歴史領域）である。

1. プロジェクトの概要

近代オリンピックの研究は、長らくクーベルタンの思想の研究、あるいはオリンピック普及運動に重要な足跡を残した人物の哲学をめぐる研究に特化されてきた。

また、東京オリンピックの開催が決まってからは、児童に対するオリンピック教育およびオリンピックの経済効果の研究にほとんどの研究が振り向けられている。この現状は、本プロジェクトが再検討を試みよう

としているオリンピック復興運動についての新たな視点からの考察とは異なっている。事実、直近の研究として、2016年末に出版された『学問としてのオリンピック』（山川出版社、2016年）においても、これまでの欧米におけるオリンピック研究を問い直すような論考はほとんどなく、新たな視角が提示されることはなかった。

そこで、本プロジェクトにおいては、これまでの欧米における研究の蓄積を受容しつつ、当事国であることによって、相対的な評価が加えられてこなかったイギリスとギリシアにおけるオリンピック復興運動について再検討を行うことで、これらの復興運動がクーベルタンの主導による近代オリンピックの開催までの道をどのように切り開いていったかを明らかにする。

本プロジェクトでは、特に以下の諸点に焦点を当て、議論を深めていく。

(1) 啓蒙主義思想と古典古代の受容の諸相

18世紀に英仏独で広がった啓蒙主義思想は、上流階級の人びと、知識人・エリートの往来とそれによるネットワークを介して、ヨーロッパの他の地域にも拡散していった。啓蒙主義思想が、近代国民国家の形成に重要な思想的根拠を与えたことは言うまでもない。一方、啓蒙主義思想の発展の背景には、古代ギリシア・ローマ文明についての研究と模倣があった。古典古代文明のなかに《偉大さ》を発見し、そこに《偉大な近代国家》を形成するための模範を見出したのである。スポーツについての関心も同様であった。

19世紀半ば近くになると、オリンピックの復興運動がヨーロッパのさまざまな地で始まるが、最も持続的かつ熱心に行われたのはイギリスと独立後まもないギリシアであった。本プロジェクトにおいては、イギ

リスとギリシアにおけるオリンピック復興運動に焦点を当て、両者における復興運動の背景をたどりつつ、オリンピック復興運動と両者における古典古代の受容の差異にも目を向けたい。また、両国におけるオリンピック復興運動が、近代オリンピック誕生の父とされるクーベルタンのオリンピック構想にいかなる影響を与えたかについても考察していきたいと思う。

(2) ローマ人のオリンピック：競技と法

ローマはギリシア的精神・思想の多くを受け入れ、それらを積極的に理想とした。しかし、ことオリンピックに関してはやや様相が異なっている。古典古代としてときにひとつとして扱われる両者のこの相違には注目されよう。ローマにおいてスポーツとはおよそ観戦するものであった。ギリシアが参加することで共同体意識を高めたのに対し、ローマはあくまでも観戦者として、参加する主体としてではなく観る主体としての共同体意識を目指したのだろうか。そして、このいわばショーとしてのオリンピックを最大限利用しようとしたのは、とりわけアウグストゥスのローマを理想としたムツリーニもまた同様であったろう。本プロジェクトでは、ローマ人のオリンピック、すなわち観るための競技を成立させる装置として、いかにローマがこの分野の法を発展させていったのか、そこにどのようなスポーツ（競技）概念の形成が読み取れるかにも関心を向けてみたい。近代オリンピックとスポーツについて法史的な観点から検討していきたいと考えている。

(3) スポーツ思想の独英比較

啓蒙主義思想は、いかなる観点から、何を歴史的源泉として、何との関連でスポーツ観を形成していったのか。本研究では、その問題性と可能性を、古代ギリシアの受容の仕方を例に検討する。

たとえば、ドイツ啓蒙思想の一翼を担ったフィヒテが19世紀初頭の講演『ドイツ国民に告ぐ』において身体能力の段階的な育成を主張し、また19世紀半ばにヤーンによって「体操」の語がギリシア語から「ドイツ語」のトゥルネンへと転換され、独特なトゥルネン運動が展開されていくとき、範型はいずれも古代ギリシアであった。例示した二人ともドイツ・ナショナリズムの形成に寄与した思想家だが、フィヒテが能力

の段階的な育成なくしてギリシア的体育を身につけることはできないとして、計画的で規律化した体育教育の意義を主張したのに対し、ヤーンのトゥルネン運動はむしろ規律訓練型の練習を排し、より自主性を重んじる指向性も持っていた。そこには、近代ドイツならではの国家意識の問題もあった。他方で、事情の異なるイギリスにおいても、同様に古代ギリシアを参照軸としながら、オリンピック復興運動が展開されていった。

果たしてドイツとイギリスの啓蒙主義思想家たちは、古代ギリシアの何を受容（摂取と排除）しながら、それぞれの身体観・体育観を形成し、近代オリンピックへと連なるスポーツ思想を作り出していったのか。とくにイギリスとドイツの啓蒙主義思想における、古代ギリシア思想の発見と受容をめぐるコンステラティオンを、文明化理論を背景になされたノルベルト・エリアスのスポーツ研究を参照しながら検討してみたい。

(4) ヨーロッパのスポーツ思想に対するアジアの影響

東アジア諸国はオリンピックの歴史において、ヨーロッパの国々に比べ、後発国といわざるをえないであろう。日本、韓国および中国がオリンピックを主催したのは近年のことであり、最初に金メダルを獲得したのもそれぞれ1928年、1976年、1984年と大きな遅れをとっている。スポーツ歴史学者のアレンは「オリンピックという大舞台の脇役にすぎない」と表現したほどである。確かに、ヨーロッパ発祥のオリンピックにおいて、東アジアはこれからもある意味で「部外者」であり続けるかもしれない。しかし、これらの「部外者」がオリンピックに与えるインパクトを考察することもオリンピック全体像を捉えるための重要な視点だと考える。文化背景の違いはもちろん、後発国である（経済発展においても）ゆえの東アジア諸国の特異性を明らかにしていきたいと思う。

(5) スポーツと教育：ヴィクトリア時代の教育とスポーツ

近代オリンピックの研究は、従来、クーベルタンの思想の研究に特化されてきた。近年、とりわけ2012年のロンドンオリンピックを契機に、イギリスにおけるオリンピック復興運動にも関心が向けられるようになったが、研究の中心は、中上流階級およびパブリックスクールにおけるスポーツの伝統とクーベルタンの思想との関係におかれるにとどまった。

そこでこのような視点に対し、本プロジェクトでは教育学（教育史）の視座から、“スポーツ”、あるいは、“身体教育”に関する考察を行いたい。

クーベルタンが近代オリンピックの着想を得たといわれるものの1つに、イギリスの男子パブリック・スクールにおけるスポーツの実践があるといわれることから、この様相を探ってみたい。また、その考察結果をもとに、女子教育を冲塩が研究関心としていることから、女子パブリック・スクールにおけるスポーツの実践の様相を探ることも現時点では考えている。

(6) イギリス労働者階級とスポーツ

クーベルタンの主導により近代オリンピックが始まった1896年は、イギリスにおいてヴィクトリア女王による統治が行われていた時代であった。ヴィクトリア女王の統治は、イギリスが産業革命をほぼ完了したとされる時期に開始する。1700年代後半に始まったとされるイギリス産業革命は、イギリスの社会を大きく変化させた。資本家が台頭し、工場において綿製品や鉄といった商品が大量に安価で生産されるようになった。工場での生産が普及する以前のイギリス社会では、「ものづくり」の技能を保有することは希少であり、生産に携わる人々は、'artisan'として特権をもつ者としてあがめられていたことが当時の公的な文書（英国議会資料）などから確認される。

この'artisan'は機械化の進展によりその存在を変化させていったとされる。工場での機械を用いた生産では多くの不熟練労働者が雇用された。例えば、イギリス産業革命の中心となる産業の一つであった綿工業において、機械化の進展に伴い、布をつくる職人であった「手織工」が力織機に仕事を奪われ、その労働力としての役割に終わりを迎えたとされてきた。

しかしながら実際には、産業革命が終わりに差し掛かりヴィクトリア女王の統治が始まる頃においても、「手織工」などをはじめとする昔からの伝統的な技能を保有していた熟練職人は存在し続け、機械生産とは異なる種類の商品の生産を行っていたことが当時の一次史料（英国議会資料）からうかがえる。そして、熟練労働者であった「手織工」たちは、読み・書き・算術をはじめとする教育を受けていたことも一部確認された。

つまり、クーベルタンが近代オリンピックを提唱し

た19世紀終期は、古くから続く技能をもつ熟練労働者と新しく誕生した工場で雇用された不熟練労働者が混在する形で、イギリスの経済が展開されていったといえよう。産業革命が始まる以前の社会とは異なり、「労働者」という存在が社会に出現し、そして彼らは職人たちと一緒に共存するという新しい社会が誕生していったと考えられる。すなわち、社会の構造が18世紀とは大きく変化していたのであった。

このような社会経済のなかで、クーベルタンはその後100年以上続く「階層に関係なくさまざまな人々が参加する国際的なスポーツ大会」となる近代オリンピックを提唱したのであった。つまり、富裕層だけでなく、労働者階級も参加する国際大会の萌芽である。

そこで、本プロジェクトでは、このような社会・経済背景の下提唱された近代オリンピックが、結果すべての階層に普及していった経済的・社会的要因を19世紀の経済・社会に関する一次史料の分析・考察を通じて明らかにしていきたいと思っている。

2. ギリシアでの海外調査について

本プロジェクトでは、啓蒙主義思想と古典古代の受容との関係を主な視点の一つとしてオリンピックについての考察を行っていく。そこで、次の諸点に着眼してギリシアでの調査を行う予定である。

1. オリンピック復興に直接的な影響を与えた遺跡オリンピアとデルフィ訪問と、現地博物館での発掘の歴史についての調査（オリンピア・デルフィ）。デルフィのアポロン讃歌の現物を見ることは、19世紀の上流階級、知識人階層の人びとの共通の知がいかなるものであったかを体感できる。実際、少なくとも18世紀以降1970年代くらいまでは、政治演説ほかの演説において、いかに古典古代の文献の引用を原文（ギリシア語・ラテン語）でできるかが、説得の重要な要素であった。
2. 啓蒙主義時代にヨーロッパ知識人に理想視されたスパルタの調査（スパルタ）。18、19世紀の文献の理解に重要である。ギリシア人の詩においても、バイロンの詩においても、ルソーにおいても同様である。
3. 第1回近代オリンピックの開催されたパナシナイコスタジアムの発掘、修復、復元に関する調査（アテネ）。

4. 近代オリンピック開催以前にギリシアで開催されていたスポーツ競技祭についての調査（アテネ）。
5. 商業主義的な現在のオリンピックに異を唱え、古代オリンピックの精神を思い起こさせる場として4年に1度オリンピックの年に開催されているネメア競技祭の地の調査（ネメア）。

以上、5つの観点から調査を実施したい。19世紀オリンピック・ムーヴメントの関連施設を見学するとともに、そこに保管されている一次史料を閲覧したい。そして、その一次史料を日本国内において分析し、啓蒙主義思想と古典古代の受容との関係性を明らかにしていく。一次史料については、メンバーの間でその内容を共有できるよう、翻訳もすすめていきたい。調査時期は、2019年2月を予定している。

3. むすびにかえて

前述のように、近代オリンピックの研究は、従来、クーベルタンの思想の研究に特化されてきた。近年、とりわけ2012年のロンドンオリンピックを契機に、イギリスにおけるオリンピック復興運動にも関心が向けられるようになったが、研究の中心は、中上流階級およびパブリックスクールにおけるスポーツの伝統とクーベルタンの思想との関係におかれるにとどまった。この間、労働者教育の一環としてスポーツを推奨したブルックスの紹介もおこなわれたが、ブルックス

の思想と中上流階級の教育と文化との関係、ブルックスの目指したものと古代オリンピックの関係ならびに近代オリンピックの創造との関係について検討されることはほとんどなかった。また、同時期にギリシア人の知識人、富裕者のあいだに生まれたオリンピック運動については、ほとんど顧みられることもなかった。本プロジェクトにおいては、これまでばらばらに言及されることはあれ、総合的に考察されることのなかった、イギリスとギリシアにおけるさまざまなレベルのオリンピック復興運動とクーベルタンの行動・思想との関係を明らかにしていきたい。さらにギリシア王国の国王を輩出していた19世紀ドイツにおけるスポーツ思想を取り上げることから、オリンピック・ムーヴメントをさらに重層的に解明していく。わが国において類似の研究は存在しないばかりか、海外におけるオリンピック研究においても、このような研究はほとんど手つかずの状態にある。その意味で、本プロジェクトの共同研究としての意義は大いにあるといえよう。さらに、本プロジェクトにおいては、オリンピック・ムーヴメントの全体主義国家における受容、中国における受容といった視点にも取り組み、近代オリンピックの創造の過程で内包されていた問題がどのように展開されていったかについても、新たな視点から切り込む予定である。この点でも、類例を見ない研究といえよう。



パナシナイコスタジアム